

# 次に託す社長の想い

## 事業承継への道標

経産省の調査では、全国で70歳を超える中小企業・小規模経営者が今後10年間で約245万人に達し、その約半数は後継者が未定だといわれている。現状を放置すると廃業が急増し、2025年頃までに累計で約650万人の雇用、約22兆円のGDPが失われる可能性がある。また技術やノウハウが消滅し、ものづくりの基盤に打撃がおよぶ可能性もある。とはいえ後継者の育成を考えると、事業承継自体には5年～10年は

かかると言われており、早めの準備や計画が必要となる。今回は次世代への事業承継を考え、現在進行形でさまざまな取組みをおこなう企業の代表に登場いただいた。福地氏と村上氏とともに父の跡を継いだ2代目社長。会社を「継ぐ想い」と「継がせる側の想い」。その両方が理解できる2人が、自身の承継経験や円滑な事業承継のための計画、次世代に託す想いまでを心おきなく語っていただいた。



左から

**村上精機株式会社**

代表取締役 **村上 周三氏**

**福地金属株式会社**

代表取締役 **福地 守氏**

### 創業者の想いを引き継ぎ、 次にバトンを渡す、その覚悟。

—おふたりとも創業者の跡を継がれて事業を維持され、まもなく後継者に道を譲るという立場にいらっしゃいます。まずは創業者である先代からご自分が継がれた頃のエピソードをお聞かせください。

**福地** 当社は父が創業者で、1961年にプレス加工からスタートしました。その2年後に冷間鍛造プレス機を導入してから業績が上向いて、10倍広い現在の場所へ移転。その後は高度成長の波に乗って成長を続けました。



人兄弟の長男だった父は生活のために跡を継ぐことになりました。当時は時計も海外製の機械式しかなく、中のギアもノコ

とヤスリを用いて手でつくる時代でした。

**福地** ちょっと異色の経験の持ち主ですね。

**村上** そうなんです。その後、仕事が広がって測定器の製造から当社の歴史がはじまります。ここで培われた「きさげ技術」がのちに会社の命運を決めました。これは摺動面の精度をあげるために、平面度2ミクロンまで人の手で削り取る技術ですが、手間がかかるわりに儲からない(笑)。しかし価値のある技術なので、これは伸ばしていくべきだと感じていました。

**福地** ものづくりの基本の仕事ですよね。私が継いだ頃は、決まった顧客から決まった部品を決まった工程通りつくる、そんな時代。言われた通りにしていれば仕事は順調に伸びるし、ほっておいても仕事がくるので営業担当もいない。その代わりに父は得意先とゴルフや飲みに行ったりが目立ち、私から見れば「経費を使う人」というイメージがあって(笑)。私は一所懸命ものづくりをすることこそが本業という考えだったので、「これがなかったら、もっと利益が上がるのに」と思い込んでいました。

**村上** それなら私も「経費を使う人」ですね(笑)。まあゴルフは仲良くなるためのひとつの手段です。得意先と打ち解けて話せる関係になると、おのずと仕事が増えますから。それも1.1倍とか1.2倍の話ではなくて、継いだ頃の売上が約2億5000万円に